

MOVIE:「JANIS」



ジャニス・ジョプリンのドキュメンタリー映画「JANIS」
3/19～ 新宿武蔵野館, 吉祥寺バウスシアター

LIVE:ボイラーズ 1990.1.22 渋谷エッグマン

いくら声をふりしぼって歌って、それがブルースってわけじゃない。それは、ただの声。いくら襟をさらけ出したって、それがブルースってわけじゃない。それは、ただのからだ。いくら卑猥なことをいったって、それがブルースってわけじゃない。それは、ただのこぼれ。いくら客が踊って叫んだって、それがブルースってわけじゃない。それは、ただの騒ぎ。魂をつかまえないままじゃ、それはブルースのようなもの、じゃない。私の魂はふるえない。ブルースを歌うんじゃない、魂をつかまえた歌がブルースになるのだ。ほんとうを歌っているのに嘘に聞こえる。「熱いステージ」と歌っているのに私の心は冷えたまま。

だけと!!!

アンコールの「王様と魔」は、ほんとうか「真実」になって、私の魂を見つめさせた。身重かひとつしなかった。瞬きも呼吸も止めた。いぼだった。この一曲だけだったけど、真直な時間を獲得した。

ボイラーズは必見! 2/20 新宿アンテリウム, 毎日 原宿歩行者天国

(追記) 1月28日原宿歩行者天国でのライブは殺気だっていて異様だった。なんなんだろ? と思ってエッグマンで録ったテープをききなおしてみた。ステージがはじまるまで、会場にかかっていた音楽も録れていたのだが、それが「スタンド・バイ・ミー」だと突然気がついた。そのとたん、1989年10月17日 渋谷公会堂でやったTHE BLUE BROTHERS BANDの「スタンド・バイ・ミー」を思い出して、かく録したテープの「スタンド・バイ・ミー」のところをさかした。渋谷公会堂の最前列、一番はじの席で、涙をまぼろぼろ流してうずくまるようにしていた私が一気に寝て、テープもきいている私とひとつになった。ボイラーズで「これがブルースってもん」と直感できたおかげで、1989年10月17日の私の魂をもかちどききなおすことができた。そして、それは、あのときから今まで生きてきた分だけ深まっていったようだった。

感することのあまり新鮮にすぎるときそれをがいねん化することはきちがひにならないための 生物体の一つの自律作用だけれども、いつまでもまもってばかりみてはいけぬ 宮沢賢治「青森挽歌」より
7号はブルースのことを書くような気がする。今、ブルースで胸を頭もいっはいたから。

LIVE: THE BLUE HEARTS 1990.1.18 甲府P宮市文化会館

うす汚ないステージ。どうにかきけたのは悲しい導と殺しのライオンだけ。はじめの5曲くらいで椅子に座った。「リンドリン」がはじまった。かまんできず、最前列の席をたたく、ホール一番うしろにいった。アンコールは「僕の右手を知らませんか」ではじまった。「もしや...」と思ったが、やっぱりため。会場を抜け出し、さっさと帰った。ヒトロにボイラーズ見て、といたい。

1月11日ライブ(記事の分を除いて) 1/4 ボイラーズ 原宿歩行者天国
1/20 BELLETS 渋谷ラママ, 1/28 BLUE ROSE 原宿歩行者天国
1/30 横関敦ハヴ・ステーション (歌ボイラーもなかなかきかせる)

LIVE: ティラザウルス 1990.1.19, 20 渋谷ラママ
1.24 下北沢屋根裏

1月19日 渋谷ラママ
はじめから曲くらいは、なんというこたない、心に涙がたない感じだ。それなのに、いつのまにか魔法にかかたようになる。手をのばして、ティラザウルスの音楽をつかまえた、と強く思った。音楽に手をのばして、つかもろとするなんて、魔法にかかっているにきまつてる。それと、ヴォーカルの人の瞳。あの瞳の奥には闇の詞があって、それを抜けると異空間がひらけている、きっと。

1月20日 渋谷ラママ
ティラザウルスの世界と、私の世界とは、けっしてひとつにはならない。ティラザウルスはティラザウルスの世界だけに存在し、私は私の世界だけに存在する。ステージも客席も、ほとんど同じ平面にあるのに、時空はひとつにならない。ヴォーカルの人がいくらキスを投げても、ギターの人が客席の中まで来てギターを弾いても、時空はひとつにならない。そのくらいティラザウルスの世界は、現実とは異空間のものなのである。ヴォーカルの人がいったように「ぜんぶ、うそ」なのである。この日のライブは、とくにこの虚構の美しさと、虚構を現実にする凄さがあった。その凄しい虚構を視ていることで、私は私の世界だけに、一人で、大きく、強烈に、まじりこみように存在していることができました。E.O.フリッカーズやAURAの人たちが来て、なにやらいっしょにやっても、全く時空がいっしょになっていなくて、私にはティラザウルスの人たちがしか視なかったし、ティラザウルスの音楽しか聴かなかった。

1月24日 下北沢屋根裏
狭いステージ。狭い客席。みんな立っていてステージはほとんど見えなし! その狭いなか、音楽の嵐が吹き荒れ、こちらに迫ってくる。強烈! ヘヴン! ライブハウスにおさまらないものすぎ。嵐にたちむかい、それをかきわけていったら、そこにはロックンロールの核が鮮やかに眩く火をまいていた。



言語は感性的な美をほめ讃えることのみならず、よくこれを辱しえないということとアシェンバハは今また身にしみて感ずるのであった。

トーマス・マン「ヴェニスに死す」より。
ティラザウルスのライブ 3/4 渋谷ラママ

LIVE: RED HOT CHILI PEPPERS 1990.1.26, 27 川崎クラブチッタ

1月26日
開場時間が遅れ、外の寒いところで40分以上待たされ、中に入ったら前座のバンドがでてきて30分くらい薄ったのだが、それがつまらなくて、それが終ってから、また40分以上待たされ、そのあいだ、ざーっとラップがかかっていた。はじまる前にもうすっかりムカムカ気分が、できあがり、ちゃっていった。やっとはじまったと思ったら、これが全くつまらないステージ。CDきいていいなって思ったのに、ペケ!

1月27日
寒いところで待つのはゴメンと開演時間に行ったら、ちょうど前座のバンドがはじまったところ。うしろまでギッシリの観客。前座のバンドはおもしろくなかったし、また40分以上ラップをきかされ、そのあいだ、じゅういちばんうしろの壁せわにすわりこんでいた。ムカムカ気分のやり場がない。他のことも考えていようと思っ、てラップがジャマをする。ところが、はじまったとたん、脳天パンチ。パワーもすごいし、音楽もやたか。演奏はきま、ていて、ギターがすごくよくて、とって楽しい。「アーキー・イン・ザ・UK」のさわりをやるときには思わず拍手! ジャズ・ナンバーのさわりもよかった! レッド・ホット・チリ・ペッパーズ GREAT!!!

(追記) 1月28日原宿の歩行者天国でCAPTAIN ANGLE PIRATESというバンドがやっていたら、9人がきて「WE'RE RED HOT CHILI PEPPERS」といって話しかけてきて、楽器かりてやったんだった。すごい人だかりになったんだった。楽しい話じゃないですか。
来たのはベースの人と、ドラムの人だったって、
ステッカーの最高にコピー、
ハッパル最高にやかい!

